

今、政治家を問う

河野洋平

日本大学が政治家をテーマにシンポジウムをされると言う事を聞き着眼点もいいし面白いと思って伺いました。

政治について大学で議論する時には、政治原論とか、制度論とか議会の歴史とかを勉強する事が多いのですが、実際の政治は優れて政治家が何を考え、何を指すかによって変わるので政治家論というテーマが大学で議論されることはいいとところに目を付けられたと思います。

私は四二年間政界にりましたが、日大OBの政治家というと河本敏夫さんが思い出されます。ご自身が会社を経営しておられて実経済に非常な経験と見識を持った立派な政治家でした。総理をおやりになった三木武夫さんを支えて、自党内では弱小派閥で苦勞されながら三木派をまとめて三木さんを支えておりましたが、大風呂敷を広げる政治家とは全く違って口数の少ない真面目な政治家でした。また全くタイプの違った政治家として記憶に残っている秦野章さんも日大OBです。警視總監をやられその後参議院議員になられましたがその言動にはよく驚かされました。

大變庶民的で率直な物言いの人でした。

私は宮澤内閣で官房長官を務めていましたがその時宮澤内閣を強力に支持していた当時自民党の幹事長だった梶山静六さんも日大のOBでした。この人は竹下派にあつて武闘派と言われ腕力の強さで泣く子も黙ると言われた人でしたが、憲法擁護、徹底した平和主義、反戦主義の人でした。戦争を絶対してはならないと主張する士官学校出身者で自身の体験からくる絶対戦つてはいけないと言う事を非常に強く言われた人でした。正直最初の印象とは随分違つていて余計強く印象に残っています。

こういう人達を思い出してみるだけでこの法学部のテーマはいい着眼だと思えます。

私は学術的な事を言う能力もありませんが私なりに政治について考えてみると、まず民主主義社会について気になるのは、最近特に多数を占める与党の側が声を大きくして民主主義の原則は多数決だと言っている事です。私は本当は議會制民主主義においては、多数決と同時に少数の意見を尊重して話し合う事で合意を見つける事が大事だと言う事を忘れてはならないと思つていなのです。

いずれにせよ、政治家もそうですし、有権者もそうですし、一人一人が確立された個人として、個という物がなければ多数決による民主主義は成立しないと私は考えています。みんなで右を向こう、それつと何か判らないがみんなが向くから右を向くと言うような社会における多数決という物はどの位の意味があるか、誰かがこつちがいいぞと言つたときに本当に確立された個が一人で考えて本当にこれがいいと考え他方に向く、そこで多数決がこつちだと言う事になればそれはいわゆる民主主義社会として意味のある社会が確立されると思うのです。

そうしたことなしに何となくこつちがいいぞと言われさつとこつちを向く、今度はそつちだと言われさつとそつち

を向く社会、会社でも社長が左だと言って社員がみんな左を向く、その結果の多数決というものにどれだけの意味があるだろうかと非常に疑問を感じるのです。

同じように選挙で当選してきた議員が議会であまりたいした審議もせずと言われるままにあつちにとつちにと幹部に言われたとおりに賛成をして回っていることのないことを願いたいと思います。民主主義がただ多数決によって物事を決めていくのだと言われて不安を感じるのは、議員一人一人に少しでも自分自身の主張があつて、それが党議との間に違和感があつた時にその違和感をどう処理しているかを考えるからです。勿論党の公約を掲げて選挙を戦ってきたわけですからどこかで党の決定に合わせなければ党運営もできません。だから言われたとおりで唯々諾々というのではなく何かの反省と確信を踏まえて率直な意見の交換を繰り返し納得の上で合意をしてゆく事が大事だと思うのです。

当然のことながら議員の質を問うと同時に有権者自身が自らの質も問うと言う事も大事だと思います。

今回の選挙は正直に言って私はこれほどひどいとは思いませんでしたが、自民党の圧勝、野党の惨敗という結果になるだろうとある程度予想はしていました。それは選挙前の各政党の指導者あるいはマスコミの人達があまりに選挙という物を軽く見ているようで不思議でならなかったのです。若干の選挙の経験のある私から見ると選挙というものはそんなに簡単に当選できるものではありません。候補者を決めて党本部から何県の何区に行つて出馬しなさいと指示されてそこへ行つて「私は何党の誰それです、今度この選挙区から立候補しますから投票してください」と言つて票が集まるほど選挙は簡単ではありません。

今度自民党が大勝した、凄い勝ち方でしたが私から見ると、自民党の候補者だけが本当に選挙運動をやっていたよ

うに見えました。それがいいかどうかは別としてとにかくドブ板をならして、一軒ずつ「お願いします」「お願いします」と一回だけでなく三年間あるいは五年間に渡ってずっと頼みつづけた候補者は自民党の候補者が一番だったと思います。特に三年前に惨敗した、負けた悔しさという物があるから次は絶対に勝ちたい、負けをバネにして相当厳しい選挙運動が行われたのだと思います。もつと言うと負けただけでなく、負ける以前はずっと与党で、つまり永く権力者の側にいて、権力のうま味を充分に知っていたのです。その権力の側にいた人間が落選して一変に権力を手放してなにもないところに落ち込んだ訳ですからこれはもう大変なことだったのです。もう一回どんな苦労しても当選して「与党」に戻りたいと言う思いが、雨が降ろうが風が吹こうがもう一生懸命に選挙運動をやらせたのでしよう。ところが一方の民主党はそれまで与党の味は全然知らない民主党議員が与党になって浮かれて三年間ふわふわしてやっている内に選挙になった。三年前は風が吹いて当選したのですが今度は全然風は吹きません、落選です。これは当たり前でしょう。片方はあれだけ夢中になって当選しようと頑張っていて、一方はふわふわとしていれば結果はこうなるに決まっています。

新党も沢山出来ました。これらのリーダーたちが新党を作ってやれば選挙で当選できると思ってやったのか判らないが、結果はそんなに簡単なことではなかったと言う事です。政党を立ち上げて候補者を公募して候補者を集めて、それで全国一斉にやろうとしたようですが、そこには一人一人がそれぞれの選挙区から当選して出てくるだけの必然性というか、歴史というか絆もなにもそういうものは全く考えていなかったんですね。それで上で割り当てられた所に飛んでいったってそんなことで選挙になるはずがない。大風呂敷を広げて話をするのを最初はマスコミが面白半分に、そういう人の拡声器の代わりをつとめてワーとはやし立てた時期があったから、そんなものかなと思った人もい

たかも知れないがちよつと足元を見ると全然そんな雰囲気は見えないから途中で気がついてあつという間に火が消えたと言う事でしょう。繰り返しますが選挙はそんな簡単ではありません。

投票所という誰も見ていない場所です。誰も見ていない場所です。仕切りの中で気が変わることだつて充分にあると思いません。確かにその候補者の名前を七万人、八万人あるいは一〇万人の人が書かなければ当選しないのです。東京ドームを二回満員にしたぐらいの人が間違いなく候補者の名前を書いてくれる、信じられますか。選挙中は周りの人は頑張れ、いいぞと言ってくれます。けれど本当に投票日に投票所まで行ってくれるか、雨が降ったり、雪が降ったりそれだけでも大変なことです、その上で候補者の名前を書いてくれるだろうかと考えてしまうこともあります。なかなか確信は持てないのです。投票所に行ってきたよといわれたらもう本当に嬉しいのです。それはたとえば新聞などで投票率は六割と聞くとそれなら自分の支持者の数から行って大丈夫かなどと思うと全く違います。六割という投票率は自分の支持者も含めて六割ですから後援者のかなりの人は棄権になってしまう可能性もあるのです。

それではどの位努力したら確信が持てるだろうか。ちよつとやそつとのことではダメです。あいつは偉いよ毎朝駅の前でビラを配っているよなんて言うのは誰でもやっているのです。そんなことでは充分ではありません、もっと選挙とは厳しい難しいものだど覚悟することが重要です。

それは候補者を選んだ政党のリーダー達がもつと知るべきでしょう。特に小選挙区制というこの選挙制度は党の信用で選挙をするのです。党に信用がなくなつて候補者個人の活動に党が負ぶさっているようではとても政党とは言えません。

長い歴史のある自民党は何度も失敗したりしてそんな事はよく分かっているようです。最近の候補者選びは何かの団体に支えられているとか、巨額の資金を出せる後援者がいるという時代とは変わって来ているようです。自民党で国会議員になろうとする人がいるとその人を担いでいる地方議員の人はみんな一人一人が選挙前にドブ板を鳴らして一軒ずつ有権者を訪ねて当選してきた人なのです。町会議員も村会議員も同じです。そういう人がみんな裏路地を回って「おはようございます」「こんにちは」と声を掛けてまわっているのです。支持するかどうかは別です、支持者も支持しない人もとにかくみんな顔なじみなのです。そういう人が集まって応援しているのですから他の政党の候補者と選挙のやり方が違うのです。たとえばある政党の候補者に三〇人が集まって支持するといっても結局支持してくれる人はやはり三〇人でしかないことが多いのです。どこが違うのだろうか。

昨今の政党に政治家を育てるシステムがあるかが問題です。自民党はこれまで派閥という物があつて、派閥が若い政治家を育ててきたのです。最近派閥有害論が出てきて、派閥が衰退し弱体化してその結果若手を育てるシステムが無くなってしまったと言われています。多くの政党には若手を育てる仕組みがないように思われます。自民党でも現在では世襲はいけない、官僚は好ましくないとわれ、今あるのは公募による候補者捜しが比較的フェアでいいと言われるようになっていきます。しかし公募とは本当にいい仕組みなのでしょうか。少なくとも今はまだ、十分にこなれているとは言いきれない。例えば選挙区ごとに公募するのでしょうか。まず論文を募集する、論文が集まる、一体誰がこれを審査するのか、審査するだけの能力を持った審査員が各選挙区ごとにいるだろうか。仮にそんな素晴らしい審査員がいるならその人が候補者になったらどうだろうか。どうも始めから然るべき候補者がいて公募はカモフラージュだという説がすでに出てきたところがあるといえます。口頭試問も誰がやるのか、会って話をして割と感じが良

かった、選挙向きだと幹部が言ってみてもそれがどの位その選挙区の地域に密着して信頼される候補者になるだろうか、最悪の状況はそうやって選んでおいて君は自己資金はどの位あるのかねと聞いて本人は借金をして退職金を入れて五〇〇万円いやもう少し頑張ったとしても、結果は、それでは問題にならない、最低これくらいはなければ選挙なんか出来ないと言つて断られてしまうこともあるようです。ところが更に信じられないような話しは、その断られた候補者が今度は相手の党に行つて公認候補になつて出てきたというのです。

党も目指す政策をしつかりと詰め、候補者たらんとする人も自分の持つ理想を整理し充分に周到な準備をしなければならぬ。

およそ政治を志すものは理想を持たねばならないと思います。「理想」などと夢物語をするより、現実が大事だ、理想など意味がないなどと言う人がいるようです。しかし私は理想を持たないのなら政治を志す意味がないと思つています。

リーダーが変わつて、最近政治の保守化とか保守主義への傾斜などと盛んに言われます。一体保守とは何でしょう。私は保守とは自然の形だと理解しています。今保守化と言われているものは本来の保守とは思えません。私はあれはある意味で過激な右寄りの運動だと思つています。

保守とはそんなに過激なものではありません。もつと自然なもので、これまでの過去を肯定し、それを穩健に改善していこうと言う動きだと思います。保守は進むこともあれば、退くこともあるのです。いけいけとどんどん右肩上がりに進んで行くものを保守だと言えはその理解は間違つていると思います。もつと安定した自然な形で、一つ一つ物事を着実に改善していこうという穩健な動きこそが保守ではないでしょうか。

一歩ずつ理想に近づこうとして努力する、努力なしに理想に近づけることはないし、しかし努力すれば必ず理想を達成することが出来るとも残念ながら言えませんが、しかしその努力こそが若い人が政治にチャレンジする意味だと思います。

もう一つ言いたいことは私が政治にかかわって大事だと思ったことは、新しい知識も勿論大事だが、やはり経験というものがとても大事だと言う事でした。こんなことを言う私を保守的な老人だと見る人がいるでしょうがそうでもない、やっぱり政治というものは経験を大事にする事が重要だと思います。あのキッシンジャー氏も政治家にとつて大事なのは経験だと言っています。それは政治家としての経験だけではなく人間としての経験も大事だという事です。経験は金では買えません。政治に於ける知識は三段跳びで飛び越えていくことの出来ない大事なことがあると知る必要があるのです。その経験は自分で直接体験する事もあるし、先輩から教わることも経験の中で非常に重要だと言う事を是非考えて欲しいのです。

若い頃から政治の道に入って色々な先輩の指導を受けました。最初に出会ったのは田中角栄総理大臣でした。田中総理はロッキード事件で逮捕されましたがやはり記憶に残るリーダーでした。彼は若手を集めては「君らはおもつと勉強しろ、そしてその道の専門家になれ、農業の専門家でもいい、文教の専門家でもいいだろう、とにかく専門家と言われるように勉強しろ、そうなれば官僚の言う事に影響されることはなくなる。官僚が自分の言い分を通そうとどんなに説明しても、逆に君らが官僚を使うことが出来るようになる。官僚は人事異動があつて数年で持ち場が替わる。しかし君らは何年でもその専門分野を得意として議員立法を提出し自分の理想に向かって進むことが出来るのだと言うのです。田中総理は熱心に言い続けました。

田中時代が終わってしばらくして大平正芳総理が出てきたのです。大平さんはまた我々に色々と指導をしてくださいましたが、大平さんはこう言うのです。専門家は大事だ、専門知識は重要だ。しかしそれだけでは政治家ではない。政治家と言うものは全体のプロポジションを見てこれで全体のバランスはいいかどうかを判断しなければならぬ。こちらが出過ぎていたらそれを詰めるか、そちらを足すかしなければと考えるのが政治家として重要なのだ。だから一つの分野だけをよく知っていてもダメで全体のプロポジションをよく見る事が重要なのだと大平さんはよく言っていました。

私たち若手は悩みました。田中さんに散々言われて専門家になろうと思って努力している途中に大平さんからスペシャリストでは意味がないとは言わなければいけぬ、それだけでは政治家として充分ではない、政治家はゼネラリストが大事なのだと言われたのですから。

クリスチャンだった大平さんはまた「政治家というものは民を恐れなければならない」つまり国民を恐れると、さらに「神を恐れろ」神様を恐れなければいけない。そして「自然を畏怖する心を持たなければならない」。「民を恐れ、神を恐れ、自然を畏怖する心を持つ」と言うのです。これは大平さんの政治に対する哲学だったのでしよう。

宮澤喜一総理という人は私の政治の師匠でした。語学の達人でキッシンジャーも日本の政治家で宮澤が英語が一番上手だと言っていました。私はむしろ宮澤さんの中国に対する理解度、漢文、漢籍の知識が素晴らしいと思っていました。宮澤総理に私は官房長官を任命されましたが、最初に総理から「大事なことは、権力にあるものが権力を行使しようとする時は出来るだけ抑制的でなければならぬ」と言われました。つまり出来る限り権力を使わないと言う気持ちでいて欲しいと言うのです。常に薄氷を踏む思いで毎日の政治に取り組んで欲しい、注意深くどんな小さな

音も聞き落とさぬような態度で政治に向かえとも言われたことを今でも覚えています。

こういう一つ一つの言葉を先輩から言われて緊張しながら聞いたのを忘れないのです。また年が上でしたが私の議員として同期の友人から、代議士になる前に暫く右翼の大物の家で書生をしていた時のことをよく聞きました。仲間がその時どんな指導を受けたのかと聞くと、いや口をきいたことは殆どないと言うのです。しかし一回だけ玄関の前を掃除していたとき突然出てきた先生から車を呼んでこいと指示されて、車が来たらこれから相撲に行くから助手席に乗れと言われた。前の席に乗ると、後ろから君は相撲が好きかと聞かれ「ハイ、好きです」と答えた。口をきいたのは後にも先にもこれだけしかないと言うのです。それでも彼にとっては書生をしていたと言う事が、彼の思想的な問題でなく精神的支柱になっていたようでした。若い議員にそれぞれどんな精神的支柱とも言うべきものがあるのだろうか。こうしたものは経験から蓄積されるものでもあるのです。政界に入る前でも、政界に入ってからでもいろいろな場面で学ぶことがあると思います。

経験と人間的な成熟、それがもつと必要ではないか、何かそうした事を余り意識せず何となく時間だけを積み重ねて、重い責任を負おうと言う事になった若い政治家の姿を見て、充分にウォーミングアップが出来ずに急遽マウンドに呼ばれてコントロールもままならない内に打ち込まれてしまった投手を思い出しました。政治家としても人間としても充分精神的に成熟した状態で重い責任を負って活躍できるように普段からの準備が期待されます。衆議院と参議院の拗れも民意の表現なのです。その状況の上で民意に添った政治的答えを探していくことが求められるのが議会制民主主義の使命と心得て理想を胸に努力を重ねていって欲しいと念願しています。